

136 団扇と扇子 (2022年11月10日)

オルセー美術館が所蔵するエドゥアール・マネ作「団扇と婦人（ニナ・ド・カリアスの肖像）」（写真右）の背景に描かれている円形のものをご存じでしょうか？それは、団扇です。ジャポニスムが流行した時代に、日本美術の影響を受けたマネの作品の中でも、その影響が直接的に表現された作品の一つです。



団扇は、フランス語では扇子と同じ単語で訳されることがあります。どちらも風をあおぐための道具ですが、両者は形が異なります。扇子は折り畳み式であるのに対して、団扇は平面です。風をあおぐ以外の用途として、現代の日本では、扇子は能、歌舞伎や落語などの芸能に使われ、装飾が美しい飾り物の扇子もあります。一方で、団扇は寿司を作るために炊いた米を冷ますときなどに使う調理道具、社名を印刷した広報媒体や夏に浴衣に合わせて身に着ける小道具として使われることが多いです。総じて、扇子よりも団扇の方が、庶民の生活用品として使われていることが多いと言えます。

扇子は、古くは扇と呼ばれていました。扇は、中国を発祥の地とする説もありますが、専門家によれば、日本で生まれたことを示す資料もあるそうです。16世紀に東洋で作られた扇がヨーロッパへ渡り、17世紀以降はヨーロッパでも扇が作られるようになりました。絹、レースや羽根が使われた装飾性の高い扇が作られるようになり、上流階級の女性の装飾品として発展しました（写真右は、19世紀にフランスで作られた扇、ガリエラ宮（パリ市立モード美術館）所蔵）。



一方で、団扇がヨーロッパに大量に持ち込まれるようになったのは、19世紀後半になって、日本が本格的にヨーロッパ各国と交易を行うようになってから

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

です。1872年の明治政府による統計で、団扇が約100万本、扇子が約80万本も日本から海外へ輸出されたとの記録が残っているそうです。おそらく当時のパリの人たちは、日本の団扇や扇子を多く目にしたことでしょう。そのような中で、マネは前出の「団扇と婦人（ニナ・ド・カリアスの肖像）」の中に団扇を描いたことが考えられます。

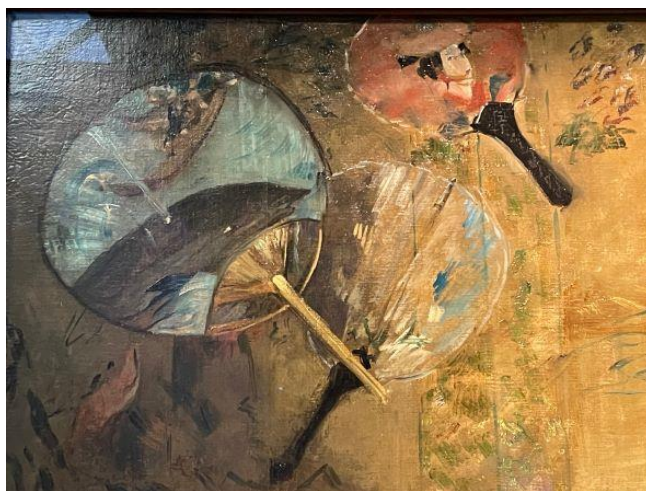


日本の扇子ではありませんが、オーギュスト・ルノワールは「田舎のダンス」（写真右）の中に扇子を描いたのも当時の



流行を表していると考えられます。カミーユ・ピサロは、扇を描くのではなく、何と扇形のキャンバスに風景を描きました（写真左は、オルセー美術館所蔵「シャポンヴァルの風景」）。

最初にご紹介したマネの「団扇と婦人（ニナ・ド・カリアスの肖像）」に話を戻して、拡大図（写真右）をご覧ください。団扇の柄が濃い茶色のものと黄色いものと、柄の形が異なる二種類の団扇があることにお気づきでしょうか？前者は、京都で作られている京うちわ、後者は千葉県で作られている房州うちわの形をしています。日本では、現在でも地方に



によって特色のある団扇が作られています。余談ですが、マネは、壁に貼り付けた団扇を描きましたが、日本には団扇を貼り付ける習慣はありません。日本には、数多くの扇面を貼る又は描いた屏風があり、マネはこのような屏風を参考にしてこの作品を描いたのではないかと専門家は指摘しています。

団扇と扇子は、形や用途に違いはありますが、どちらも日本文化や日本人の生活の中に欠かせないもので、毎年新作が発売されているロングセラーヒット商品です。